

2022年度 ソニー幼児教育プログラム

「科学する心を育てる」～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

0, 1, 2歳の実践

感じる心、動き出すとき ～映像とリアルと～



社会福祉法人種の会

アルテ子どもと木幼保園

園長 山田 寿江

# 目次

I 「科学する心を育てる」についての考え方・取り組みのテーマ	・・・・・・・・・・	1
II 実践の報告		
1 素材との出会い	・・・・・・・・・・	2
考察	・・・・・・・・・・	4
2 プロジェクター画像と音響で遊ぶ		
① 波打ち際編	・・・・・・・・・・	5
考察	・・・・・・・・・・	7
② カルガモ編	・・・・・・・・・・	8
③ 星空・天の川編	・・・・・・・・・・	9
映像での遊びをアートに繋げることについて	・・・・・・・・・・	10
3 画像で見聞きするものと自然事象との対比		
① 雨降りのもとで遊ぶ～屋上散策～	・・・・・・・・・・	10
② 絵の具遊び	・・・・・・・・・・	11
考察	・・・・・・・・・・	15
III 考察に基づく課題と今後の方向性や計画	・・・・・・・・・・	15

## I 「科学する心を育てる」についての考え方・取り組みのテーマ

この6月、年長児が園内の菜園で、自分達で育てたジャガイモ大小100個余りを収穫し、どんな料理にして食べようかあれこれ想像を膨らませていました。ところが、保育者はその収穫後の保管方法までには思いが至らず、バスケットに集めそのままテラスに置き続けたことから、数日のうちに緑色に変色。慌てて調べてみると、日光に当たったことによって、天然毒素が増えてしまったのだと判明。

楽しみにしていた子ども達の顔を思い浮かべた保育者が咄嗟に思いついたのは、これを無かったことにして、スーパーで買ったジャガイモとすり替えるという隠ぺい工作でした。ところが、保育者の間で改めて話し合う中で、これは大人側の落ち度であっても、この経験による学びも大切ではないかという結論に至り、結果、真実を伝えることになったのです。そして、その真実を知った子ども達の反応ですが、私達の想像を遥かに超えてきました。子ども達には、「食べられない」という概念は存在せずどうしたら食べられるか？が思考の中心で、毒素をとるために「水につけてみる」「もう一度お日様にあててみる」等という意見が飛び出し、実際にそれぞれの方法を試して駄目だと分かると、今度は「薬をつけてみる」「砂糖水につけてみる」と、別の方法を思いつき、保育者と一緒に試行錯誤が始まりました。

このように、年長児になってくると、昨年応募の「クラス名プロジェクト」でも「思考のジャンプ」として記していますが、“いつもの生活の中で起きる出来事に好奇心をもって、対象となる事柄について自分なりの仮説を立てたり、それがどうなるか試してみたいという欲求を持っている”ことに改めて気付かされます。そして、幼児だと言葉での表現が自在になってくるので、子ども達と一緒に出掛ける探求の旅は俄然面白くなっていきます。幼児のこの心の動き、ある日、何気なく行っていた乳児クラスの活動（以下、II 1素材との出会い）でも、幼児と同じように思考が巡っていく場面を保育者が発見。そこで、別の活動の中でもそんな乳児クラスの子どもの心の移り変わりを探してみたいと思い始めたのです。また、0歳児など小さい子であればあるほど、身の周りにある素材、植物や虫、小動物、自然の事象などは、生まれてはじめて出会うこと（もの）が多く、その時子どもはどんな様子でその対象を感じとるのか、どのように心を動かし関わっていくのかをもっと知りたいという思いも湧いてきました。

当園は開園から4年目。「科学する心を育てる」ということへの職員の認識もまだまだ階段の途中ですが、それでも、例えばこのジャガイモの事件が起きた時に、どう対処するのか、何が最善なのか話し合いの中で私達なりの答えを出して保育を進めていったように、子ども達に対しても、疑問や問題が起こったときに、どう考えるのか、どうしたいのか一人一人が主体となって考え、自由に発言したり、同じ体験をした時に自分以外の人はどんなふう考えるのかを知ったり、物事によってはみんなで共有し、違う意見を伝えあったりしながら意思決定して行って欲しいと思っています。そして「どう考えるのか、どうしたいのか」という心の動きの原点となるのが乳児期から元々もっている「感じる心」であり、それを揺り動かされる体験を積み重ね、感じたことを様々な形で表現していくことが「科学する心を育てる」上でのひとつの重要な要素ではないかという考えは、職員みんなで共有していることです。

さて、具体的に乳児クラスの実践の内容ですが、当園は東京都心にあって、子ども達が感じられる自然はとても限られたものですが、そんな中で少しでも本物の小さな自然を肌で感じて欲しいと考えています。それは、散歩先で季節の花を子ども達と観察し「お花、きれいだね」と共感しあったり、団栗や落ち葉を集めて制作をして、指導計画でも「季節を感じる」といった表現で終始することも多く、もっと別の

形で子どもと自然との出会いの機会が存在して、子ども達を感じたことを自由に表現出来たら面白いのではないかと思考を巡らせました。

実践にあたって、まず、自然と一口に言ってもあまりにも範囲は広く、どのようなものにターゲットを絞るかということが問題になりましたが、何か特別な自然物をアイデアを絞って差し出すというのではなくても、大人にとってはごく普通のありふれた事象であっても、子どもと自然との出会いの瞬間を保育者が発見できるかどうか、どんなふうに捉えるかが大事であり、またそれを表現活動に繋げたり、アートという形で残し、後でその余韻を楽しみたいという結論に至りました。

さて、ではその自然の対象物についてですが、どんな小さな物でも本物と巡り会って、その見た目、感触や温度、匂いなどを直接知って欲しいという思いは勿論です。ところが、例えばクリスマスに伐採された本物のモミの木をクリスマスツリーとして子ども達に見せるなら、一方で自然破壊や地球温暖化の要因になっていくことがあるように、本物と代替品どちらを選ぶ?となったときに、その代替えが必ずしも悪いものとはいえないのではないかと議論をし、もう一点、パンデミック下で子ども達の保育園を離れた所での行動もある程度限られ、本来出来たはずの経験が出来ずにいることを感じていたので、一部の自然に触れることを映像を通して出来ないかと考え、保育室でプロジェクター機器を用いて身近な自然を再現して、子ども達がどのようにその映像と関わるのか観察してみることになりました。

## II 実践の報告 (2022年4月～7月)

### 1 素材との出会い ～乳児の思考について知るきっかけとなった実践～ 1歳児クラス

子どもの生活環境を構成する遊びの材料となる素材には様々なものがありますが、その特性をより感じられるように、敢えて色彩を持たない白い素材を選んで、その素材を見つけた子ども達がどのように心を動かし、関わっていくのかを観察してみました。



用意したもの

90cm角の黒いベース (素材とのコントラストが引き立つように)

様々な白い廃材・素材 (布、プラスチック製品、緩衝材、毛糸、ひもなど)

\*保育室に隣接する出入り自由の小部屋に配置してみました。

保育者が準備しているのをよく見ており、素材の置かれた部屋に迷いなく入って来た子ども達。

保育者は子どもが求めてきたことに対して答えつつ、なるべく見守るようにしてみました。



気になるものを選び、ひとつひとつそっと手に取ってよく観察しています。



小さな筒を立てて、その中にストローを差すと、見ていた子が真似てストローを差します。



プラスチックのジャバラ状の廃材を引っ張って伸ばし、振り回しています。



手に取った素材を次々に投げて、その飛んでいく様子を見ています。



ひとしきり素材と関わると、今度は選び取った素材をベースにゆっくりと並び始めました。



子ども達が素材と関わった痕跡がひとつのアート作品のようになりました。これは、完成形もなく、子ども達が関わった痕跡が常に変化していく流動的なものです。

## 2歳児クラス

1歳児と同じ素材を使用し、今度は少しやり方を変えて実践してみます。

朝のお集まりで、色んな顔の表情が出てくる絵本を読んだ後、「お顔作ってみよう」と誘ってみました。

\*保育室から繋がる多目的室に素材(黒いベースは20cm角)を置いて、やってみたいと思った子がテーブルに着いて行きました。



いきなり並べることはなく、軽そうなものは息を吹きかけ飛んでいく様子を眺めて、別の素材も飛んでいくかどうか確かめています。



気になったものがどんなものか、丁寧にその質感を確かめてから、並べはじめました。



顔という概念からはいつの間にか離れ、並べることが面白くなって、作ったものを「アイス!」と、保育士に伝えてきました。



隣に座った友達に「パパ好き。パパの顔。」と言いながら顔を意識して並べているようですが執着はなく、これはバラバラにしてみました。



で

顔のような?

き

あ

が



「鬼の顔」とのこと

り



「新幹線のタイヤ」とのこと

考察：1歳児では、はじめて巡り合ったものに対し、気になったものを選んで手で触れ、素材の柔らかさや硬さなどの触り心地を調べ、また、潰したり、引っ張ったり、投げたりしてその素材の持つ特性を確かめています。そして、自分の経験から何かに見立てるということをしたり、友達のしていることに共鳴して真似したり、言葉がなくても友達が置いた素材の上に自分の選んだ素材を置いて関係性を持たせたり、自然にやりとりをする姿がみられました。

次に、2歳児では素材の特性に気付くと、丸い形は目に見ようというように、顔のパーツに見立てて配置したりする一方、保育者の「顔を作ろう」という誘いからは離れて、「アイス」「新幹線」と、全然違うものに移っていく子もいます。その場合、自分の作りたいものを先に考えてそれに合う素材を選ぶというより、素材の形や質感からそれが何に見えるかを後に考えて表現していることが多いように感じます。また、何かを意識して並べるといふより、ただ心の赴くまま並べるといふ行為そのものを満喫する子もみられました。そして、1歳児では友達がしていることに少なからず影響を受けていましたが、2歳児では、一緒に素材に息を吹きかけて飛んでいくのを見て笑い合ったり、パーツを並べながら友達に思ったことを伝えたりと、友達との関わりが応答的になっていきました。

このように、前述した5歳児クラスのジャガイモの経験などから“幼児は生活の中で起きる出来事に好奇心をもって、対象となる事柄について自分なりの仮説を立てたり、それがどうなるか試してみたいという欲求を持っている”と同じような心の動きが1歳児2歳児でも見られたのです。まず、はじめて出会った素材に対して興味津々に自らそばにやって来て、まるで「あなたはだあれ?」と、問いかけるように色々なやり方で関わり対象を知ろうとします。そして、この形は〇〇のよう!と、何かに見立てたり、これは長いから振り回してみよう!これは、軽いから飛ばしてみよう!と経験をもとに仮説を立てて、実際にアプローチをしていくところはまさに“仮説を立てたり、それがどうなるか試したり”という姿だと思

いました。そして、乳児はその欲求が満たされるとスーッとその場を離れ、別の遊びに移っていき、またいつの間にか舞い戻って素材と遊び始めるといった姿が印象的でした。

今度は、「素材との出会い」の実践で発見した子どもの姿を、別のツールを使って探ってみました。

## 2 プロジェクター画像と音響で遊ぶ

テーマ ～自然の事象を機器を通して、視覚、聴覚で感じながら自由に関わってみる～

\* 0, 1 歳児は保育室に隣接する小部屋を暗めにし、プロジェクターを使って動画を音声付きで投影。

☆投影した画像については、子ども達がどんなふうに関わって遊ぶのか空想しながら、自然を感じられる景色を職員が出掛けた先で撮影してきました。



### ① 波打ち際編

最初は 0 歳児クラスです



隣の部屋で何かが起きていることに気づき覗いてみた M さん。

**ザザザ～～！**

波の音にびっくりした様子で立ち止まり、この部屋に入ることを躊躇しています。



そのうちに、月齢の低い友達が先に部屋に入っていき、好奇心いっぱいに床に揺らめく波を手で掬い取ろうとしているのをじっと見えています。



どんどん自分から関わろうとする友達に刺激された M さん。

ゆっくりと中に入って来て、触ろうとはしないものの、友達のしていることを見つめています。この日は最後まで触ろうとはしませんでした。

## 1 歳児クラス



くるり～ん！海辺の部屋に入ってくるなり U ターンをする 1 歳児。波の音も鮮明に聞こえます。みんな積極的ですが、音や雰囲気は驚いて、壁にくっついていたりの子もいました。



一人が寝転がると次々と真似して寝転がる子ども達。子ども達が自然に寝転がったのを見た保育者も一緒にごろ～ん！顔を見合っています。「ざば～ん！」と、波が打ち寄せた瞬間に擬音語を言う子もいました。

## 2 歳児クラス

\* 2 歳児は保育室の一角に投影してみました。



2 歳児は打ち寄せる波をよけようとしたり、波の満ち引きを意識して歩いています。波に濡れないようにズボンをたくし上げる姿も。



差し込む光を目で追い、プロジェクターを発見しました。



隣の保育室で遊びに使っていたシフォンの布を持って来た子ども達。風にたなびかせないようにクルクル回り、同調した子が次々に布をそよがせています。そして、布を持ったままごろ～んと波の上に横になりました。



波の上で両手を広げ、バランスをとって立ちます。





波打ち際で波と戯れています。



1歳児と同じように、ごろ～んと横になりました。身体全体を波に任せず、上半身を浮かせています。



本棚から絵本を持ってきてページをめくっています。



波の上にいるうち「ワニ～」と言いながら、パクパク口を開けるワニを身体で表現。両手の先をバタバタさせて「ペンギン！」と、なりきっている子もいました。また、誰かが動物になりきっていると、すぐに数人がその真似をする姿も。

\*暫く波打ち際で遊んだあと、今度は投影された砂浜に貝殻を撒いてみました。



手からこぼれ落ちるほど貝殻を収集すると、保育者がそばに用意しておいた透明の器を見つけ、その中に集めていきました。集めていることに没頭している時はみんな無言です。



考察：まず0歳児ですが、はじめて出会うものにちょっと警戒する子もいれば、躊躇なく関わっていく子もいます。また、ゆらゆらと動くものへの好奇心から、それを座って目で追いかけたり、追いかけて触ってみようとしていました。

1歳児は光源が何か気になり、プロジェクターのレンズ部分から光が発するのを見つけていました。ま

た、映像を通してはじめて海を見たのであっても、画像や音響がもつリアリティーは、十分にその感覚を掻き立てるものだったようで、まるで本当に波打ち際で遊んでいるようでした。そして、波打ち際の雰囲気そうさせたのか、布を風にたなびかせるという更なる表現をしています。

2歳児は、様々なやり方で波打ち際を満喫し、関わりも発展的です。はじめは感覚的に遊んでいたのが、いつの間にか水辺にいる動物を思い浮かべてなりきっていました。画像+アルファがあることで(1歳児も)子ども自身が違った方向へと遊びを展開させていきましたが、貝殻以外は保育者が意図した訳ではなく、たまたま保育室に置いてあったものを自分で見つけてきて遊びの材料にしたり、絵本を持ってきて読み始めたのは、ここは寛げる場所だと認識したからなのでしょう。

ロボットに人のような触覚や力加減を与えることができる制御技術「リアルパプティクス」の研究が進んでいますが、子ども達は誰かに教えられた訳でもなく映像の中で起きていることを、以前から知っているかのように全身を使って表現してくるのだと感じました。驚いたことに、海に行った経験のある子は殆どおらず、この映像を通して始めて波打ち際を体験したというのです。大人は映像とリアルを分けて考えていますが、子どもにとっては今日の前で起きていることが全てなのかもしれません。何でも本物を味わえるのが子ども達にとってベストだと思いますが、実際の触覚、嗅覚などは感じられなくても、すっかり映像の世界に入り込んで遊ぶ子ども達。もしかしたら、大人には感じられない冷たい波の感触、砂のジャリジャリした感じ、波が連れてくる匂いを想像で感じているのかもしれません。

そして、このプロジェクター画像を通した実践は、波打ち際から始まり、水辺を泳ぐカルガモ一家、天の川、水たまりに落ちる雨、と対象は広がっていきました。(以下)

## ② カルガモ編

いつも出掛けている近隣のもみじやま公園には、この春もカルガモ親子が姿を見せ、子ども達は池で泳いだり、植え込みを散歩するところを何度か目にしました。



追い掛けてもなかなか手で捕まらず、ままごとのお皿をかぶせようとする2歳児。



保育士とのんびりとカルガモを目で追いかける0歳児。



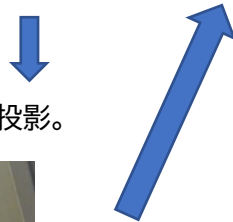
ままごとコーナーからお団子を運んできてカルガモに食べさせようとする2歳児。

③ 星空・天の川編 最初は1歳児クラスです

\* 星空の静止画を壁面に投影。



星空を見て立ち尽くしています。



\* そのあと、天の川の静止画を床に投影。



星が自分の身体にあるのを発見しました。

天の川の雰囲気を楽しみながら、今度は保育者が床にスズランテープを張り巡らせ、別の遊びで千切ったセロファンをそばに置いてアート活動へ繋げてみました。

2歳児クラス

\* 2歳児は天の川の静止画を床に投影。



自分が動くと身体に映った星が変化していくのに気が付いたようです。



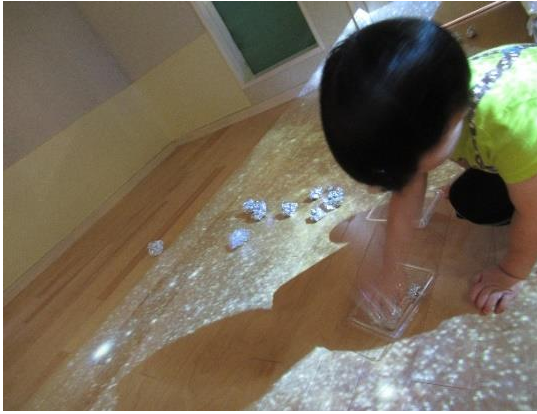
軽やかな調子で周囲を回っています。



セロファンを好きなどに置いたり、上からまき散らしたり。

天の川の上でアルミホイルを渡してみると、ごく自然に丸め始めました。





細かく丸めたアルミホイルを幾つも周囲にばらまいています。



みんなが遊んだ痕跡（アルミホイル）をネットに引っ掛けて天井に飾ってみました。

### 映像での遊びをアートに繋げることについて

乳児クラスでは言葉以外の手段で、感じたことを表現していることが多く、何かの素材と関わって遊んだ痕跡をそのまま作品にすれば、それは、星空や天の川の映像で感じた感覚や思いを形に残すことにもつながると考えました。使用した素材は、乳児クラスが扱いやすく、保育者の感覚ですが、夜空、星空を連想できるものを選びました。そして、素材をそばに用意しておくだけで、決まったやり方を細かく伝えることをしなくても、子ども達は自ら手に取って表現し始めました。また、アートだけに限らず天の川の上で横になって手足を伸ばしたり、全身を使った動きもみられ、雰囲気に合わせて自然にそのような表現が出てくるのだと思いました。

今度は、本物の自然事象を感じながら、それをアートの活動へと繋げていきました。

### 3画像で見聞きするものと自然事象との対比

#### ① 雨降りのもとで遊ぶ～屋上散策～

##### 1歳児と2歳児の異年齢

7月末。かなり激しく雨が降る日のこと。1歳児と2歳児の異年齢で、三階の屋上庭園へ。いつもこの植物を管理している地域環境委員（一般的には用務さん）と一緒に、様子を見に行くことに。今年はカラ梅雨で、このような機会はなかなか持てませんでしたが、子ども達のちょっとした呟きが聞こえるように、少人数ずつで行ってみました。



先日、幼児クラスがここでカエルを見たとのこと。「誰も連れて来ていないのに、どうやってカエルが三階に来たのかね？」と地域環境委員が話ながら一緒にカエルを探しますが、どこにも見当たりません。



「オレンジ!」と、言ったのは1歳児。植え込みの夏ミカンを見つけ地域環境委員に知らせます。



フェンス越しに、二階で幼児クラスが育てている野菜を見たり、いつも見えるはずのスカイツリーが「今日は見えないね」という話をしていきます。

## ② 絵の具遊び

そして、激しい雨が降った別の日。実際に雨が降る様子を見て、その雨音を聞きながら、一人ずつ誘って絵の具で遊んでみました。

\*テラス（ひさしが1mほど）に画用紙、三原色（三原色で大体の色が作れるので）+白の絵の具、筆、刷毛を配置。

### 最初は0歳児クラスです

絵の具の入ったパレットと筆を差し出してみました。

テラスに座ると先に絵の具を触ってから、雨が落ちてくるのを見つけたようです。



保育室に帰ろうと、座って濡れた足を拭いてもらっていた2歳児。歩いていた時とは視点が変わり、雨を下から見てひと言、「はねてるね」「また、お散歩いこうね」そんな言葉も他の2歳児から聞かれました。



筆は手に取らず、指で触った絵の具を紙にペタペタ。いつの間にか、絵の具が混ざり合っています。鼻歌でも聞こえてきそうな雰囲気。



段々と、画用紙を飛び出してウッドデッキにもペタペタ。



雨にうたれた画用紙。時間とともに絵の具が滲んでいくのを見つめています。

迷わず絵の具に手を伸ばします。



絵の具に雨水が溜まったパレットを思わずひっくり返しました。

☆0歳児は筆を使った経験はありますが、今回は自分から筆は選びませんでした。



再度パレットを手にとると、裏側がどうなっているのか見ています。

### 1歳児クラス

置かれたものを見て自然と筆を持ったので、絵の具をつけてみるように声を掛けてみました。



画用紙に筆から偶然滴り落ちた筆に気づき・・・



びっくり！思わず保育者と目を見合わせます。



息をのむように見つめるお友達。そんな中、もう一度バケツに筆を浸し同じように試してみています。

雨の気配を感じながら・・・途中で違う色に筆を浸すと、流れるように筆が進んでいきます。

\* 1

## 2歳児クラス

☆この場面のみ昨年の2歳児クラスが  
2021年6月に行っていた実践です。



Fさんは雨音を聞いているのでしょうか？  
筆が動き始めるまでに暫くの時間がありました。



筆から意図的に絵の具をした  
たらせ、色々な色で試していま  
す。

雨で絵の具が滲んでいくのを見  
て、大きな刷毛に持ち替え、上か  
ら撫でるように広がっています。

たっぷり絵の具をしみこませた  
刷毛を振って、不意に出来た色  
合いをじっと見えています。

## 今度は友達と一緒に、1歳児と2歳児の異年齢で表現

それぞれ少人数で、先に1歳児が遊んでいるところへ、暫く  
して2歳児を誘ってみました。

\*テラス（ひさしが1mほど）に面したガラス戸に模造紙を  
張り巡らせて三原色+白の絵の具、筆、刷毛を配置。



1歳

雨降りのテラスに出ると、足の裏に雨の感触を  
感じながら、滑るのが面白くて声を上げて歩き  
回っています。



1歳

暫く歩き回ったあとは、絵の具が置かれていることに  
気が付き、筆を手にとって絵の具を混ぜ始めました。



1歳

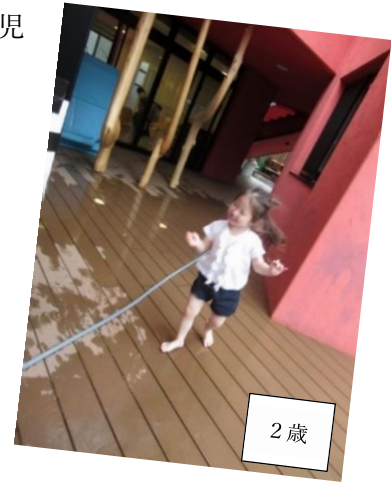
赤い絵の具を選んで、上から下に  
描いていきます。



1歳

水が溜まって来たパレットを手で回して、水面が跳ねウッドデッキに零れ落ちたり、色が混ざっていくのを長いこと観察しています。

暫くしてから、2歳児を誘ってみました。



2歳

「あめ、あめ、あめ〜！」と、歌うように言いながら弾んでテラスに出てきました。



2歳



2歳

寒色を中心に選んで、色をこまめに変えて線状に塗っていきます。



2歳

グルグルと青の絵の具で塊状のものを描いています。

点・・・点・・・点。絵の具はつけずに、雨に濡れた筆をそのまま、リズムカルに動かしています。



1, 2歳

異年齢で、青系、赤系に分けて色作りをしています。この後、両方が混ざっていきましたが。



2歳

1歳児が指で絵具を塗りたくっているのを見て、保育者に「手でもいいの?」と、聞いてきたので「いいよ」と答えると、早速指で描き始めました。



2歳

模造紙がいっぱいになって来ると、今度はウッドデッキの床に描き始め、その滲んでいく様子を見えています。

**考察:**映像とリアル双方の自然事象に関わる子どもの姿の対比を探りたい、と行った雨降りの下での実践ですが、対象にしたものの違いはありますが、実際の雨では、晴れの日とは違う空気の匂いを嗅いだり、裸足でテラスに出てひんやりと濡れるのを感じたり、絵の具がどんどん滲んでいくのを発見した子ども達。また、実際の匂いや感触を味わえたということだけでなく、何かしらの変化を目の当たりにしたり、



自分のアプローチに反応があったりすると、そのことを面白がる姿があり、雨と子ども達が双方で応答し合う、これは映像との関わりではみられなかったことです。

そして、3②絵の具遊び、2歳児クラスのはじめの画像(\*1)の雨を感じながら物思いにふけているFさんの姿からは、描き始める前から何かを感じ取っているのか、そこから表現は始まっているのかなと思える、この緩やかな時間の流れは本物の自然事象にしか作れないものだと感じました。

それから、異年齢での表現(3②絵の具遊び)ではもちろん個人差はあるものの、雨に対する感じ方が2歳児になってくると、線状に寒色で表現したり、絵本などで見ていることもあってか一般的に大人が絵で表現する雨に近づいているの対し、1歳児が雨の音を感じながらその時使いたいと思った色は赤で、これは既成概念ではなく、ごく自然に選んだ色と言えるでしょう。一方で、描き方は上から下への線状の表現が中心であるのは1、2歳児とも同じで、雨の降り方を意識しているかのようでした。(1歳児は2歳児が描き始める前に描いていたので2歳児の影響は受けていない)また、はじめ筆を使っていた2歳児が1歳児の指で描く様子を見て真似をするという、年上の子どもが年下の子どもにしていることに影響を受けるシーンもあり、互いに刺激を受けあう存在なのだ改めて感じました。

そしてもう一点、今回の一連の実践の中での保育者の関わりですが、何かを発見した瞬間や心の動きを見落とさないように出来るだけ見守ることに徹し、子どもが元々もっている『感じる心』を摘み取ったり大人の価値観を先に植え付けることのないよう、子どもの投げかけに答えたり、何かに気が付いたときに共感するようにしてみました。すると、先に幼児さんにみられた、生活の中で起きる出来事に好奇心をもって、対象になる事柄について「どんなものかな?」と想像し、「知りたい!」と、関わっていく姿は、Ⅱの実践で乳児が素材、映像、自然事象と関わる時にもみられ、やはりその多くは言語以外の方法で表現されている事が分かりました。一方で、1歳児が同じ波打ち際の映像で1か月後に遊んだ際「濡れちゃうね」「気持ちいいね」と、初回にはみられなかった感じたことを言葉にして表現する場面があり、以前はまだ言葉に出来なかった感覚を言葉にしているのか、新たに湧いてきた感覚なのかは分かりませんが、このように成長とともに、これまでと違う表現をしたり、思考を変化させたり、発展させていくこともあり、先回りせず長い目で見守っていくことも「科学する心」を育てる上で必要であると感じました。

### Ⅲ考察に基づく課題と今後の方向性や計画

課題についてですが、映像に対する子ども達の関わりを興味深く思う一方で、映像は大人になれば幾らでも自分で選択し鑑賞出来るツールであり、子どもの時だからこそ本物の自然物や自然事象を肌で感じて欲しいという気持ちもあり、その是非について職員間で話し合いを続けていますが、明確な答えが見つからずにいます。ただ、いつも子どものそばにいて感じることは、子ども達が求めているものは最終的には自分の手で触れ、自分の手でつくり出すリアルで、それは映像の先にあるものだと体感しているので、その途中過程で何かを感じたり知ることのひとつのツールが映像であっても、濫用されることなく、適切な場面で使用できればいいのではないのか、という取り敢えずの結論に至っています。今後については、視覚、触覚だけではなく聴覚にも焦点を当てて、映像は使わずに鳥のさえずりの音声や、実際の風鈴の音などに特化した環境を作り、それをアートや表現活動へ繋げるなど、聴覚がもたらすものの影響を探ってみたいと考えています。また、紅葉や雪など季節に合った映像の下で、映像に関連する葉っぱや木の実、雪など本物の自然物を取り入れて、映像とリアルが一体となった場面での子ども達の関わりを引き続き探っていきたいと考えています。

研究代表者名 戸塚 陽子  
執筆者 竹澤 暁美